
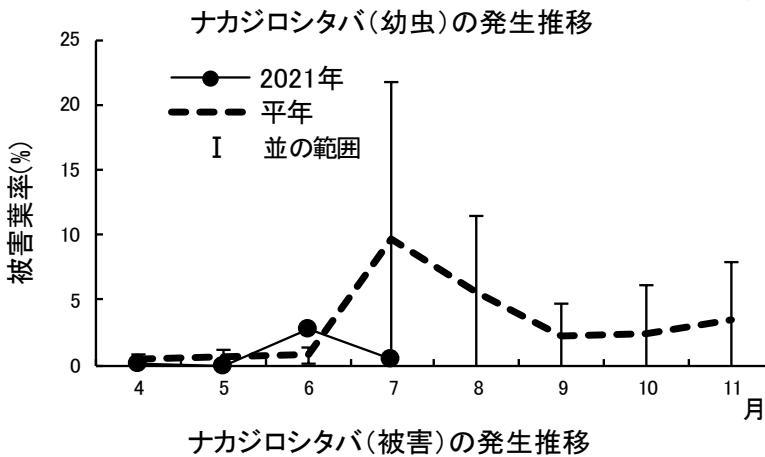
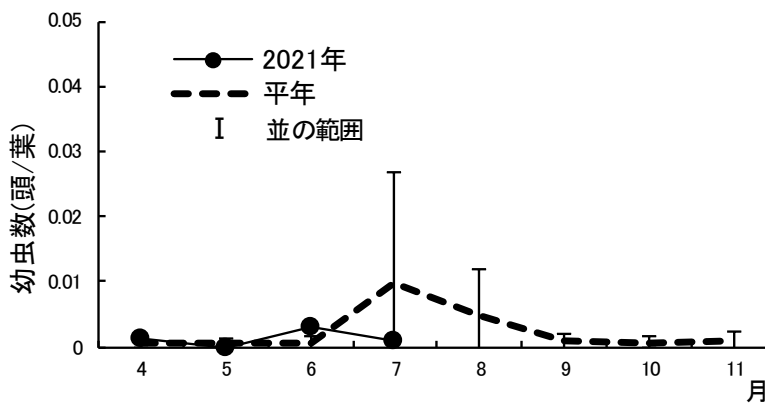


作物	カンショ	地域	沖縄群島
病害虫名	① ナカジロシタバ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↘	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	


調査結果



幼虫発生ほ場率：25% (平年値 34%)

防除のポイント

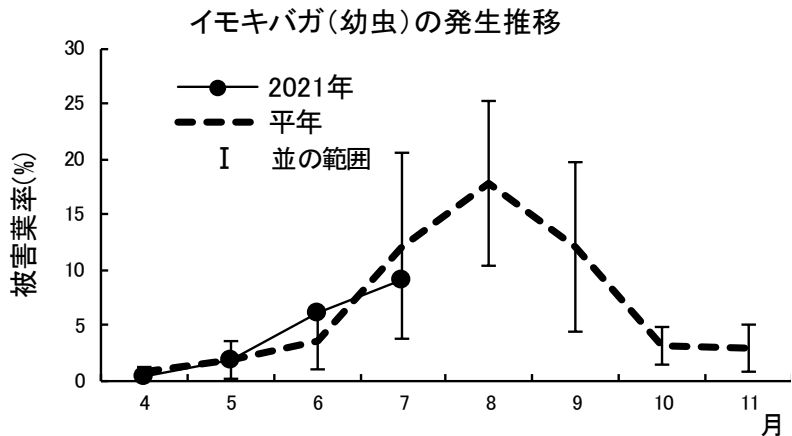
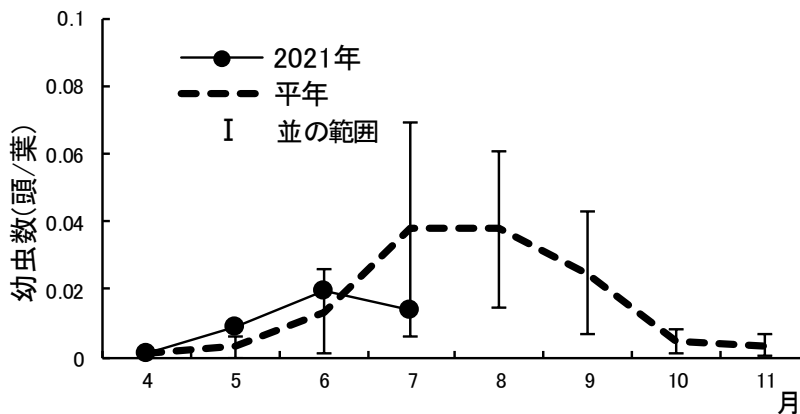
- ・老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除が重要である。

作物	カンショ	地域	沖縄群島
病害虫名	② イモキバガ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	→	
		8 月の発生量 (平年比)	並

予報の根拠

平年の発生量の推移 (→)


調査結果



幼虫発生ほ場率 : 88% (平年値 70%)

防除のポイント

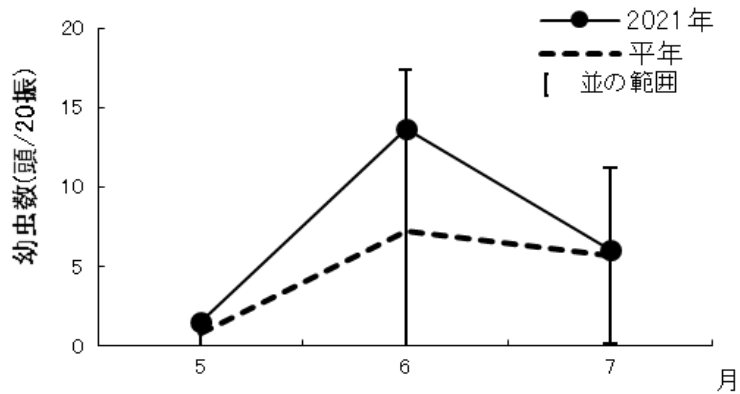
- ・老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除が重要である。
- ・つづった葉の内部に潜んでおり、直接薬剤がかかりにくいいため浸透移行性のある薬剤を使用する。

作物	さとうきび	地域	沖縄本島
病害虫名	バッタ類		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	—	
	8 月の発生量 (平年比)	—	

予報の根拠

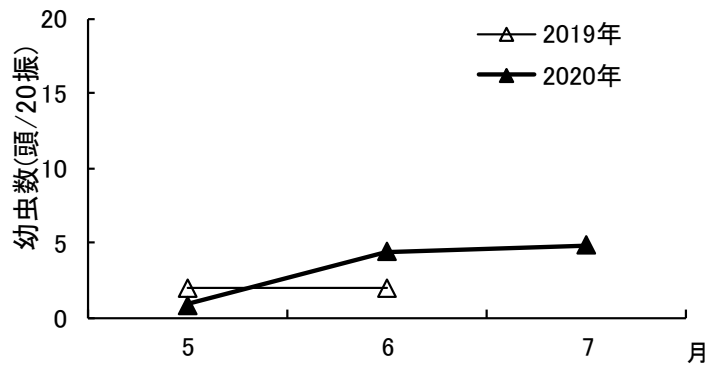
調査結果

今期と平年の推移



バッタ類(幼虫)の発生推移

過去2年の推移



バッタ類(幼虫)の発生推移

・防除員報の報告：多発生（久米島）

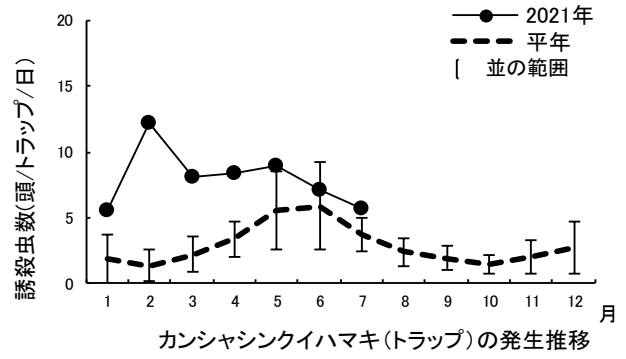
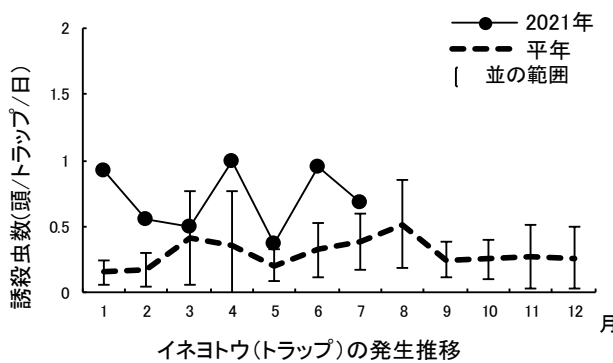
防除のポイント

- ・発生源となるほ場及び周辺の除草を徹底する。
- ・成虫防除を実施する場合には、活動の鈍い早朝に一斉防除を行うと効果的である。

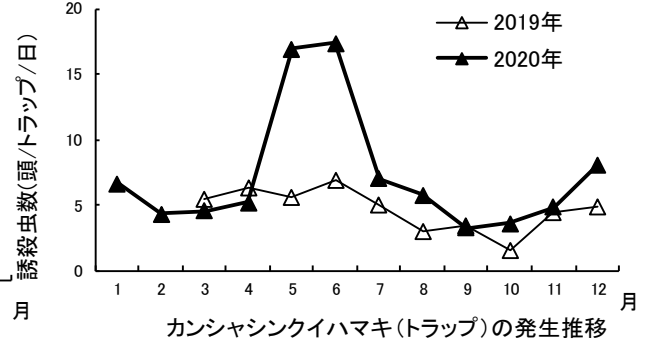
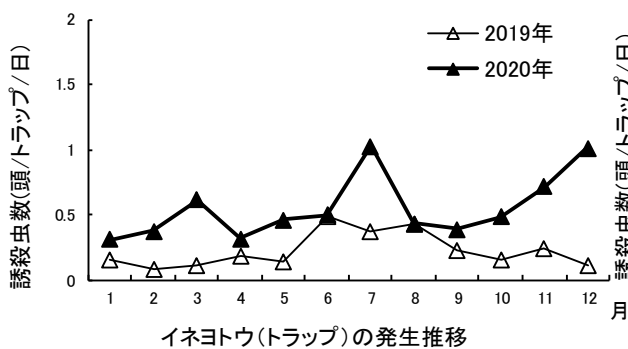
作物	さとうきび	地域	沖縄本島	
病害虫名	メイチュウ類(カンシャシクイハマキ・イネヨトウ)			
調査結果	7 月の発生量 (平年比)			やや多
予報	7 月からの増減傾向			—
	8 月の発生量 (平年比)	—		
予報の根拠				

調査結果

今期と平年の推移




過去 2 年の推移



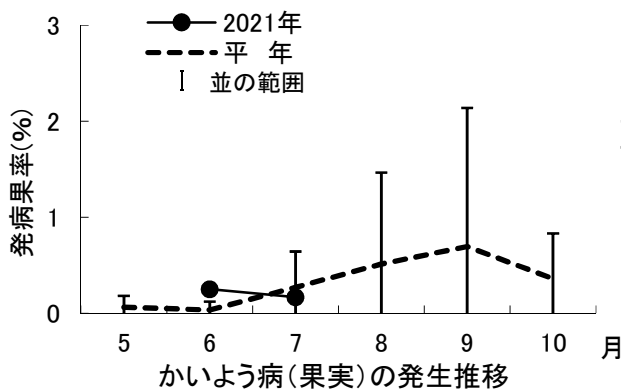
防除のポイント

- ・ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

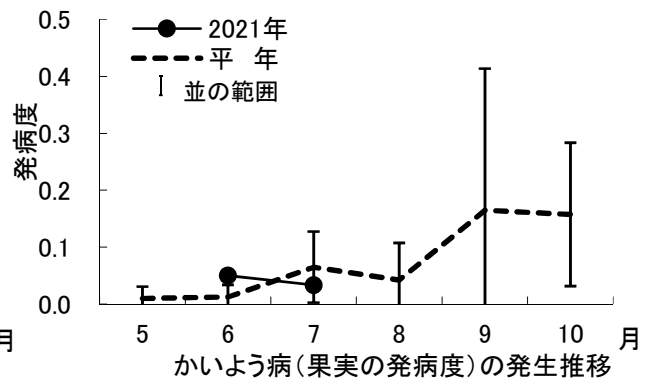
作物	かんきつ（温州みかん）	地域	沖縄群島
病害虫名	① かいよう病		
調査結果	7 月の発生量（平年比）	並	
予報	7 月からの増減傾向	↗	
		8 月の発生量（平年比）	並
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）	

調査結果

(発病果率)

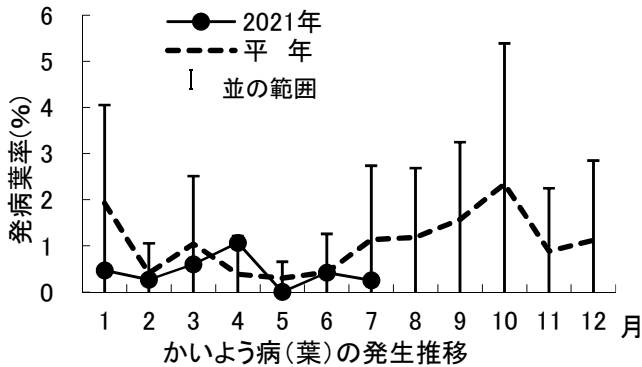


(果実の発病度)

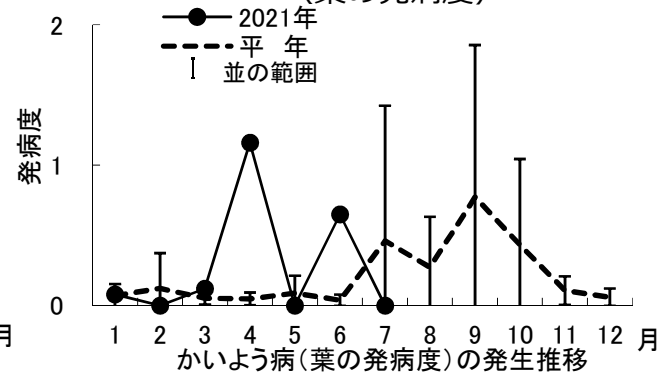


- ・ 発病ほ場率：25.0%（平年22.2%）

(発病葉率)




(葉の発病度)



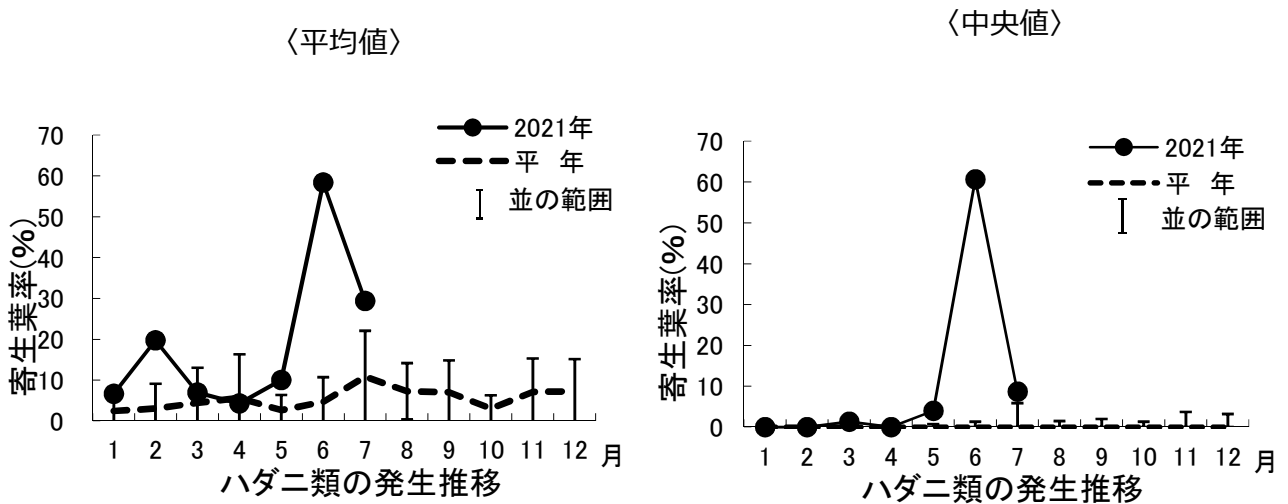
- ・ 発病ほ場率：25.0%（平年31.0%）

防除のポイント

- ・ 罹病枝などの病斑が伝染源となり、台風による葉や枝の傷口は感染を助長することから、台風前後ともに薬剤防除を行う。
- ・ 本病はミカンハモグリガによる食害痕から侵入しやすい。

作物	かんきつ（温州みかん）	地域	沖縄群島
病害虫名	② ハダニ類		
調査結果	7 月の発生量（平年比）	やや多	
予報	7 月からの増減傾向	↓	
	8 月の発生量（平年比）	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移（↓） 台風襲来の影響	

調査結果




- ・ 発生ほ場率：50%（平年値：36.6%）
- ・ 一部ほ場で多発生が見られた

防除のポイント

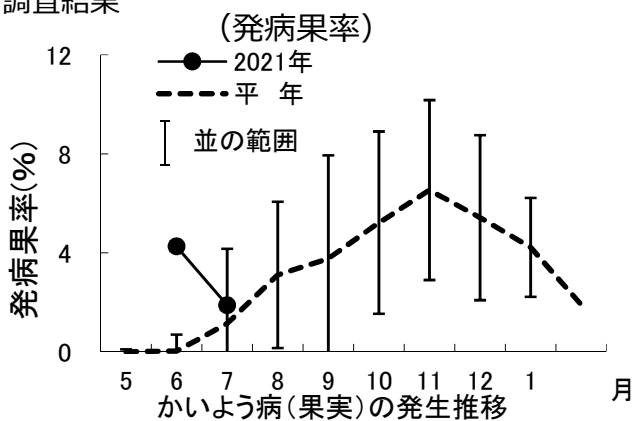
- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。



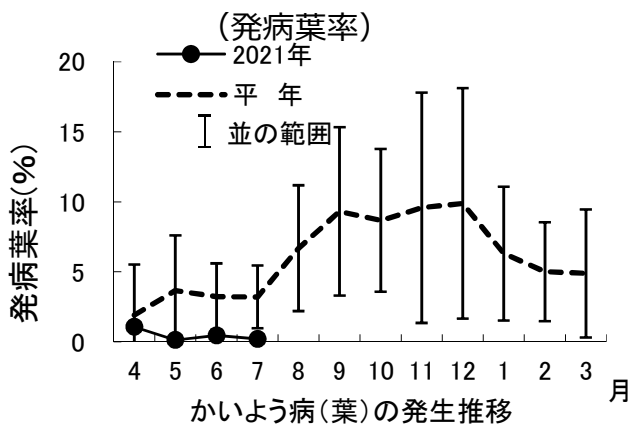
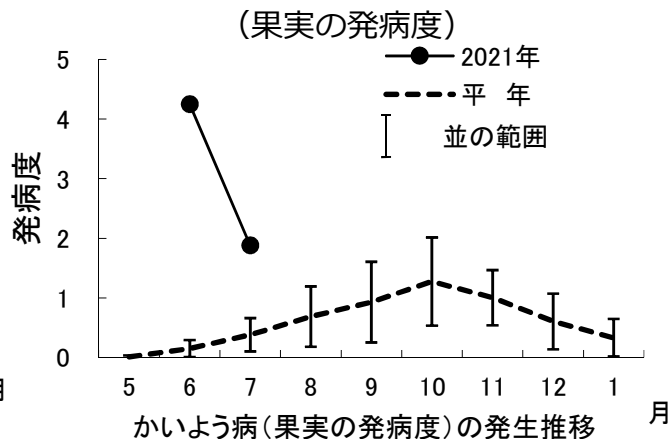
ハダニの寄生による葉のかすれ症状

作物	かんきつ (タンカン)	地域	沖縄群島
病害虫名	① かいよう病		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↗	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

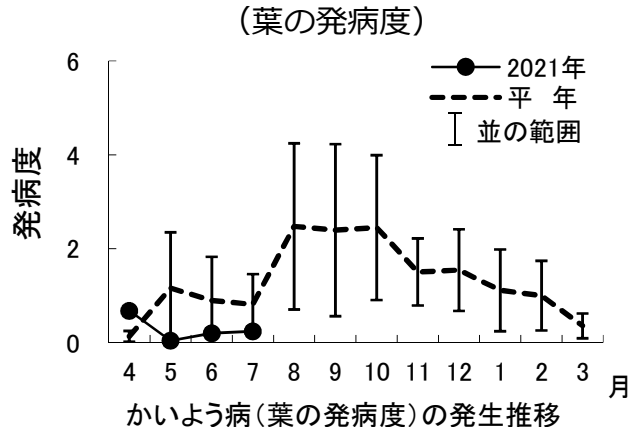
調査結果



・ 発生ほ場率：80.0% (平年54.8%)



・ 発生ほ場率：40.0% (平年76.2%)




防除のポイント

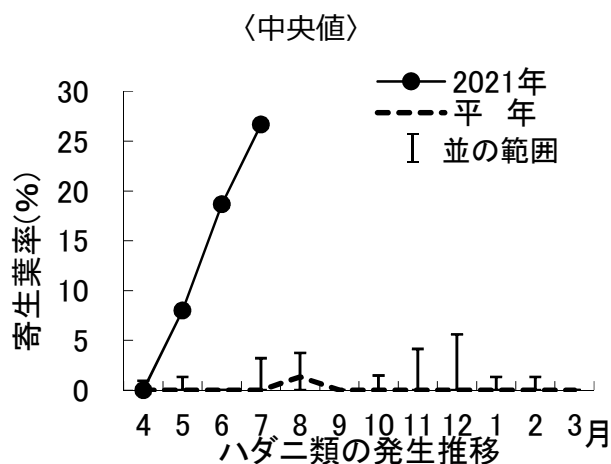
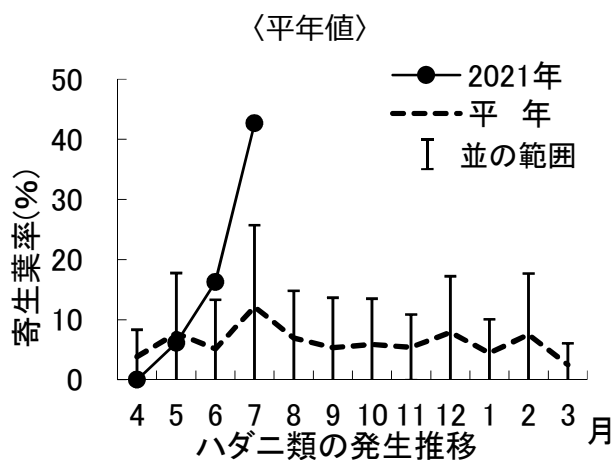
- ・ 罹病枝などの病斑が伝染源となり、台風による葉や枝の傷口 (風傷) は感染を助長することから、台風前後ともに薬剤防除を行う。
- ・ 本病はミカンハモグリガによる食害痕から発生しやすく、翌年の伝染源になるので、ミカンハモグリガ被害葉の除去に努める。

被害葉→



作物	かんきつ（タンカン）	地域	沖縄群島
病害虫名	② ハダニ類		
調査結果	7 月の発生量（平年比）	やや多	
予報	7 月からの増減傾向	↓	
	8 月の発生量（平年比）	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移（↓）	

調査結果




・ 発生ほ場率：60.0%（平年値：38.1%）

防除のポイント

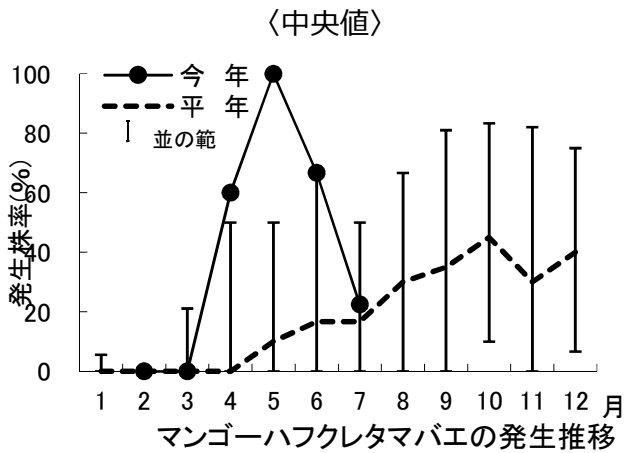
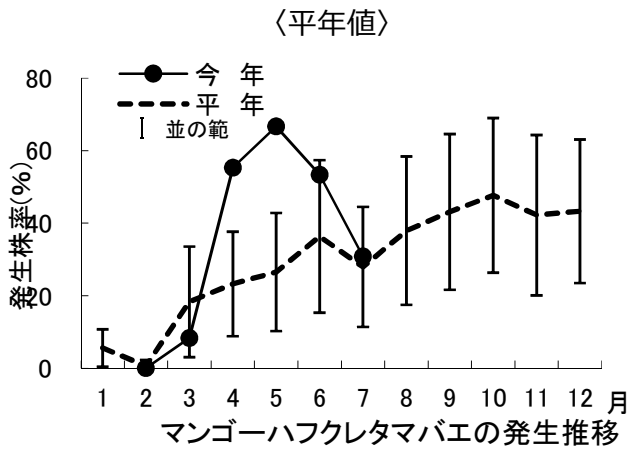
・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。



ハダニの寄生による葉のかすれ症状

作物	マンゴー	地域	沖縄群島
病害虫名	① マンゴーハフクレタマバエ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↗	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	


調査結果



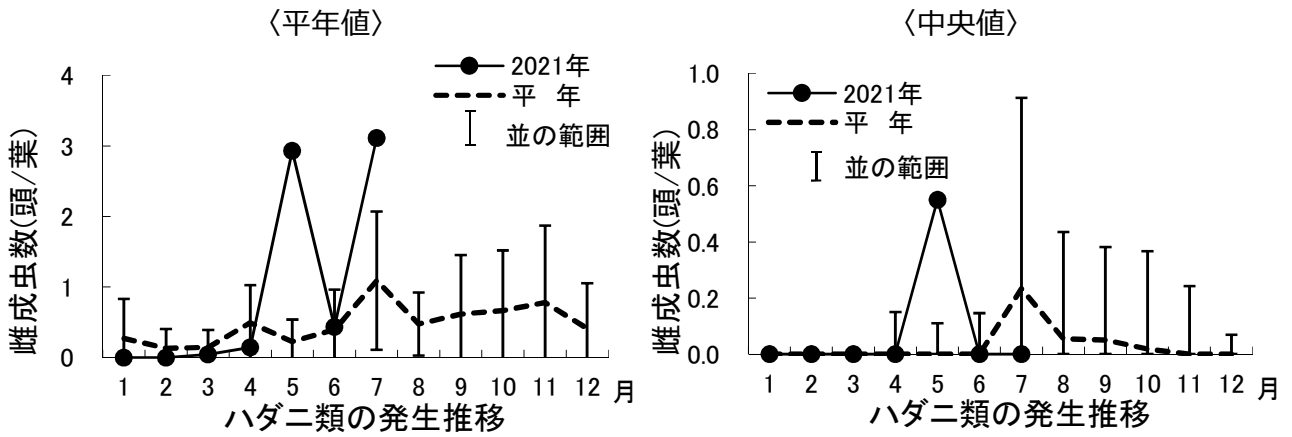
- ・ 発生施設率 : 66.7% (平年値 : 56.9%)

防除のポイント

- ・ 幼虫は、新葉から新梢の軸までの柔らかい組織内に潜行して食害し、成熟すると飛び出し、地面に落下して蛹化する。
- ・ 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。


作物	マンゴー	地域	沖縄群島
病害虫名	② ハダニ類		 <p>シュレイツメハダニ</p>
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	やや多	
予報	7 月からの増減傾向	↓	
	8 月の発生量 (平年比)	やや多	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)	

調査結果




- ・ 発生種：シュレイツメハダニ
- ・ 発生施設率：42.9% (平年値：61.5%)
- ・ 一部ほ場で多発生

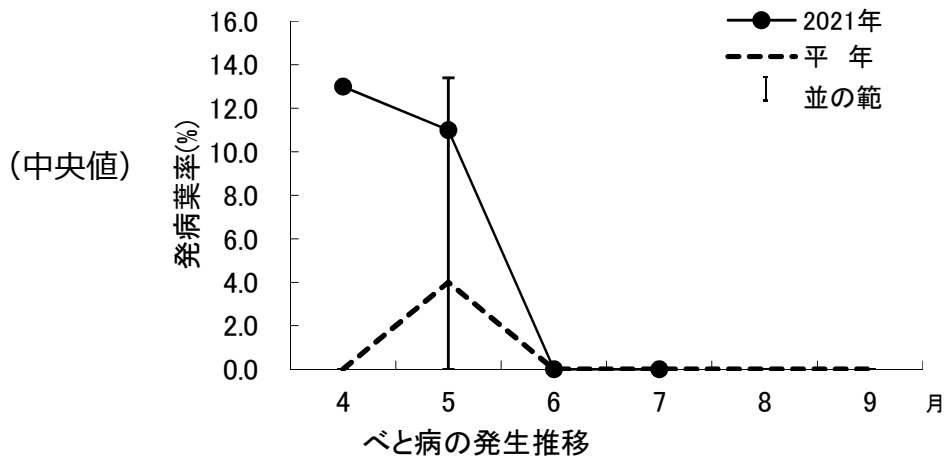
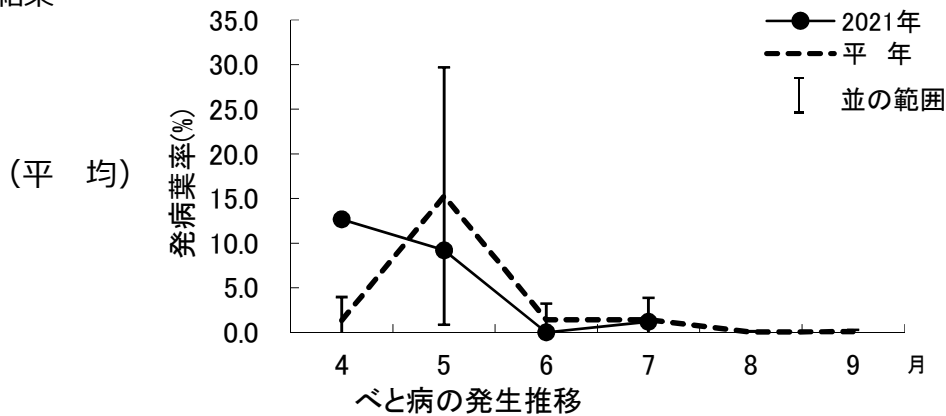
防除のポイント

- ・ 幼虫は、新葉から新梢の軸までの柔らかい組織内に潜行して食害し、成熟すると飛び出し、地面に落下して蛹化する。
- ・ 不要な 、早い時期に除去する。

ハダニの寄生による葉のかすれ症

作物	ヘチマ	地域	沖縄群島
病害虫名	べと病		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↘	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	

調査結果



・発病ほ場率 40.0% (平年12.0%)

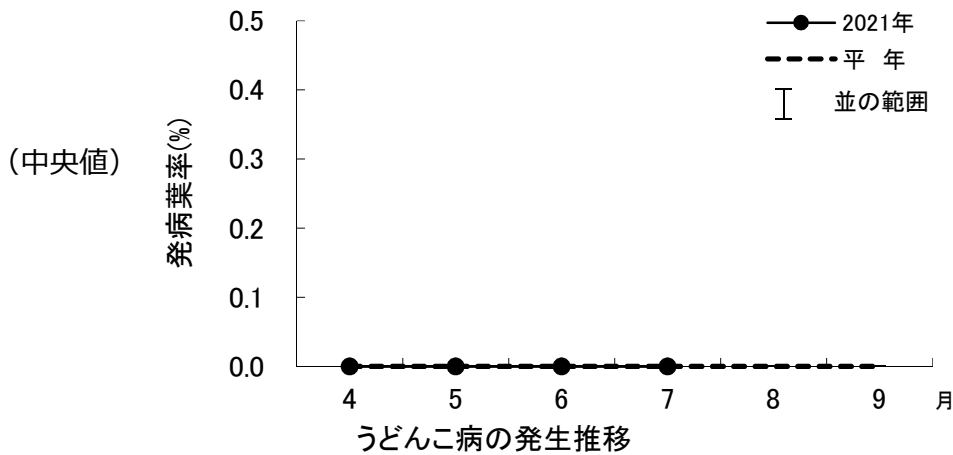
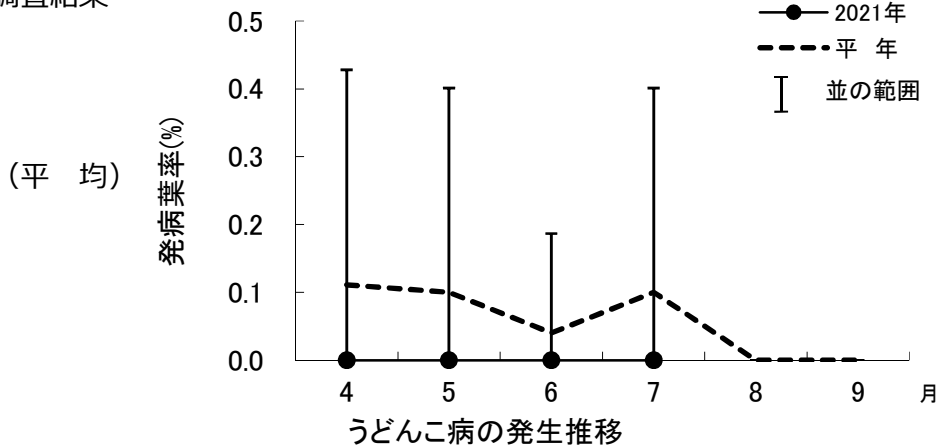
防除のポイント

- ・気温が10～25℃で多湿条件下で発生しやすい。
- ・老化した葉を除去し、採光・通風を良くする。
- ・適正な施肥管理を行う。



作物	ヘチマ		地域	沖縄群島
病害虫名	うどんこ病			
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並		
予報	7 月からの増減傾向	↘		
	8 月の発生量 (平年比)	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)		


調査結果



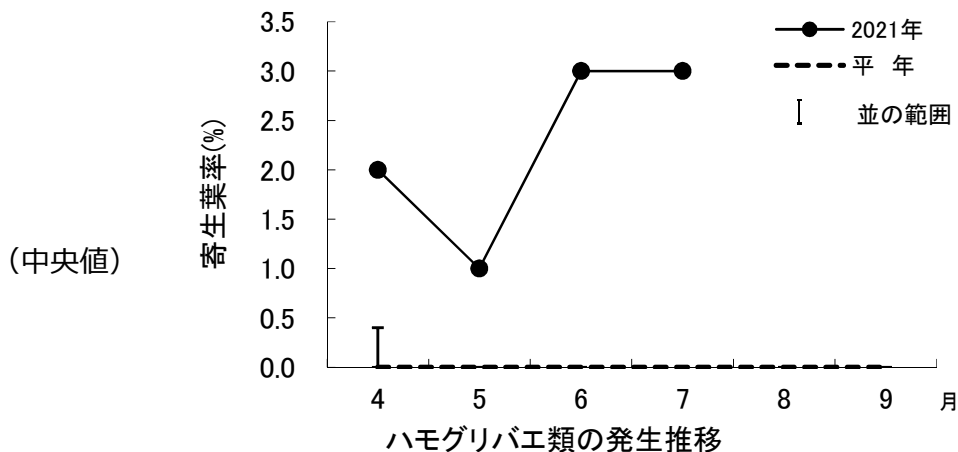
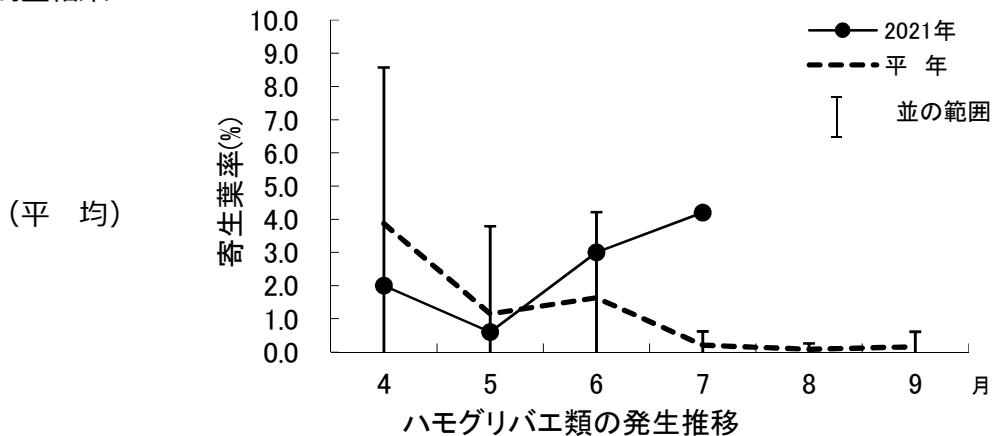
・発病ほ場率 0.0% (平年 4.0%)

防除のポイント

- ・下位の罹病株や残葉は速やかに除去し、風通しを良くする。
- ・窒素過多にならないようにする。
- ・草勢を維持し、適切な施肥管理を行う。

作物	ヘチマ	地域	沖縄群島
病害虫名	① ハモグリバエ類		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	多	
予報	7 月からの増減傾向	↓	
		8 月の発生量 (平年比)	多
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)	


調査結果



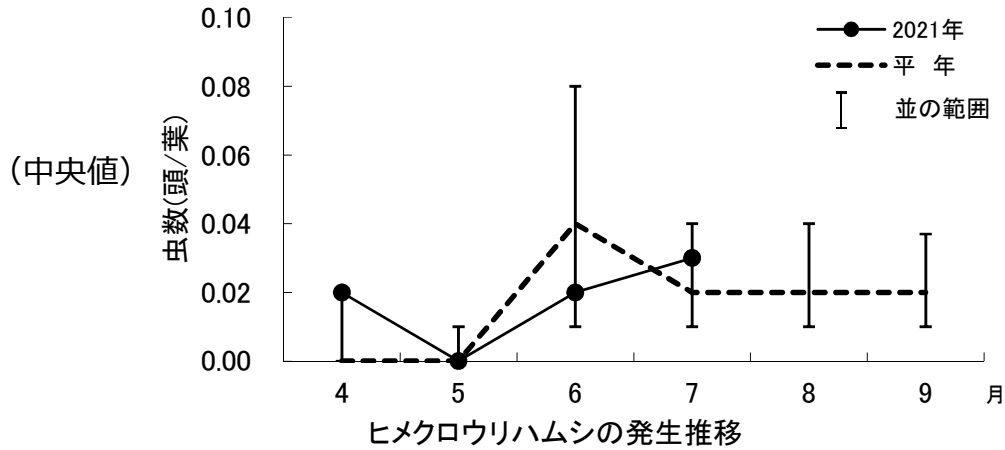
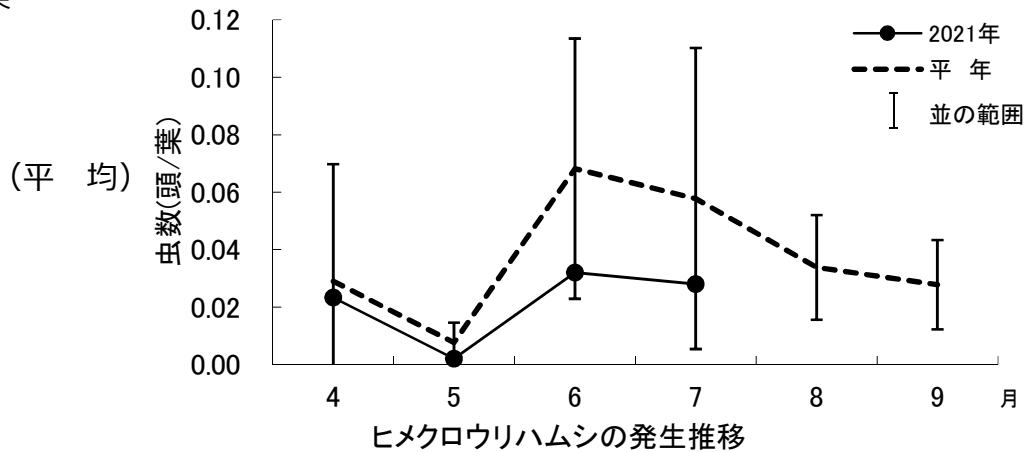
・発病ほ場率 100.0% (平年 8.0%)

防除のポイント

- ・本種の寄生痕から病害が侵入する可能性があるため、発生初期の防除を徹底する。
- ・ほ場周辺の雑草は本種の発生源になるので除去する。

作物	ヘチマ	地域	沖縄群島
病害虫名	ヒメクロウリハムシ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↘	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	


調査結果



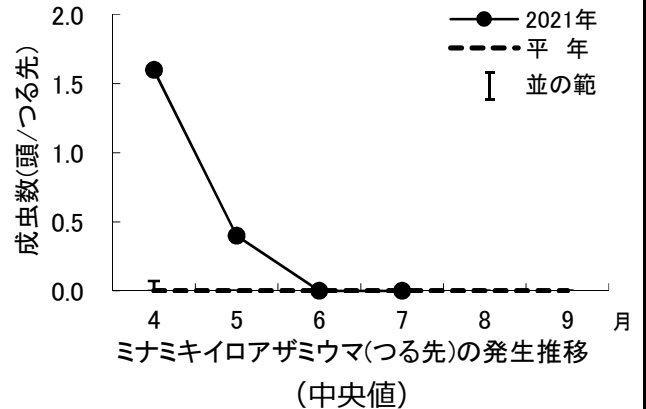
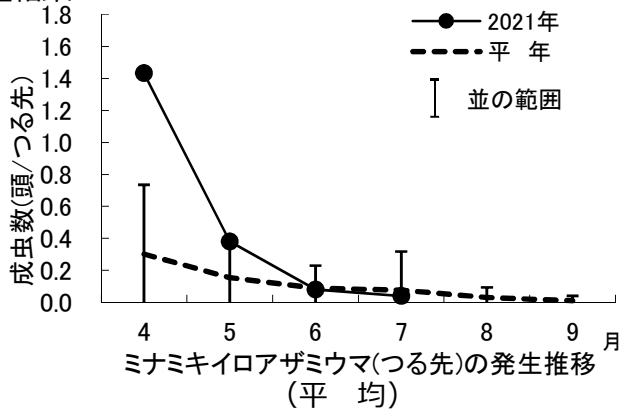
・発病ほ場率 80.0% (平年 74.0%)

防除のポイント

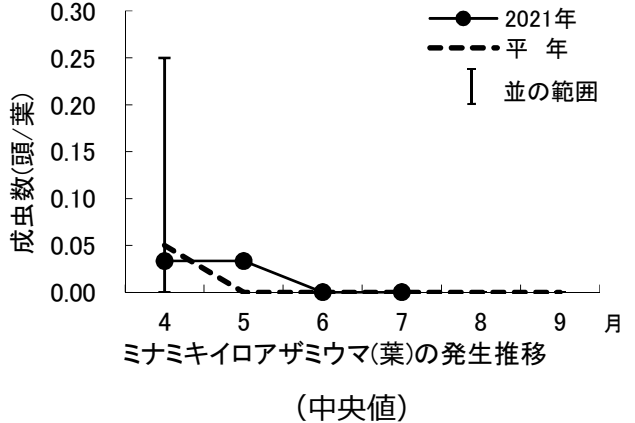
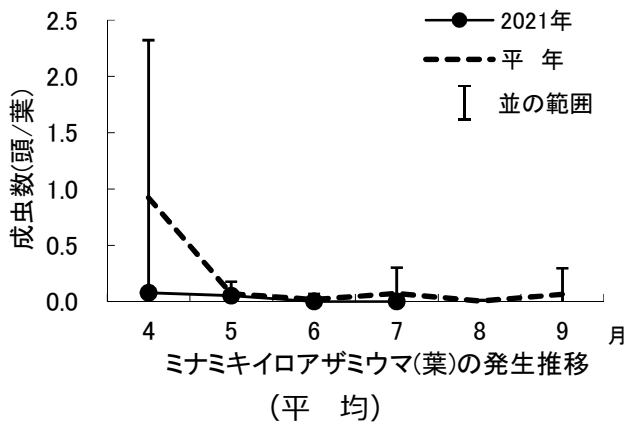
- ・シルバーテープなど光反射資材を利用し、成虫の飛来防止に努める。
- ・ほ場内外のウリ科雑草は発生源になることから、根も含めて除去する。
- ・産卵防止のため、地際部をシートなどで覆う。
- ・動きの鈍い午前中に成虫を捕殺する。

作物	ヘチマ	地域	沖縄群島
病害虫名	ミナミキイロアザミウマ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↓	
		8 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)	

調査結果




・発病ほ場率 20.0% (平年 10.0%)



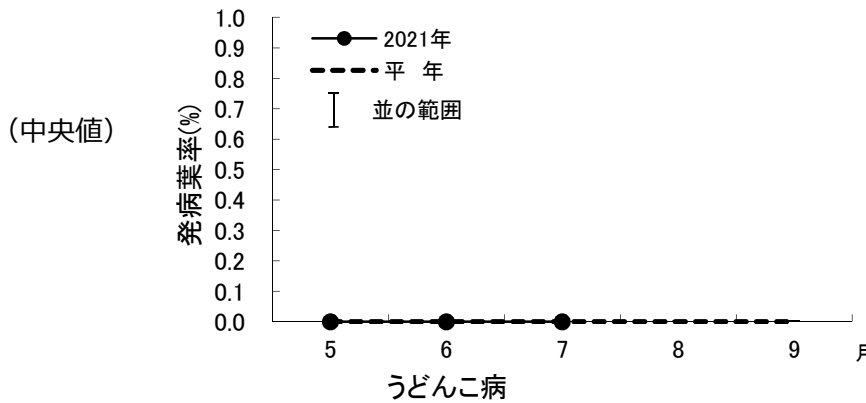
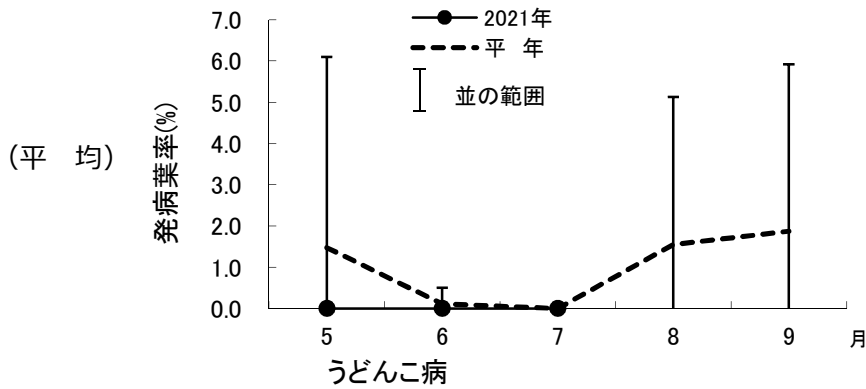
・発病ほ場率 0.0% (平年 12.0%)

防除のポイント

- ・葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布する。
- ・多くの雑草に寄生するため、ほ場内外の雑草除去に努める。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

作物	オクラ	地域	沖縄群島
病害虫名	うどんこ病		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並	
予 報	7 月からの増減傾向	↗	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果



・発生ほ場率0.0% (平年0.0%)

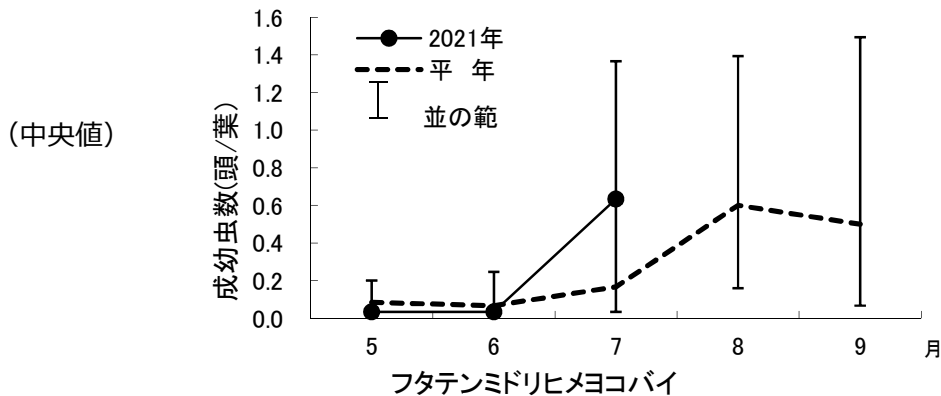
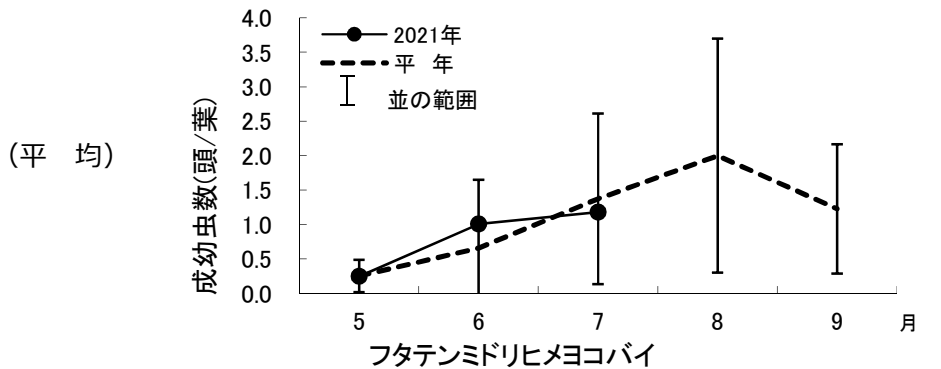
防除のポイント

- ・下位の罹病株や残葉は速やかに除去し、風通しを良くする。
- ・窒素過多にならないようにする。
- ・草勢を維持し、適切な施肥管理を行う。

作物	オクラ	地域	沖縄群島
病害虫名	フタテンミドリヒメヨコバイ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↗	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	



調査結果



- ・発生ほ場率60.0% (平年75.6%)
- ・一部ほ場で激発

防除のポイント


・多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・防除に努める。



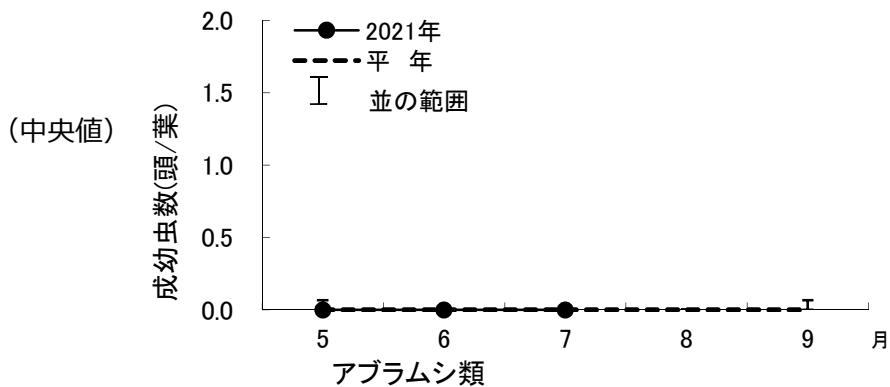
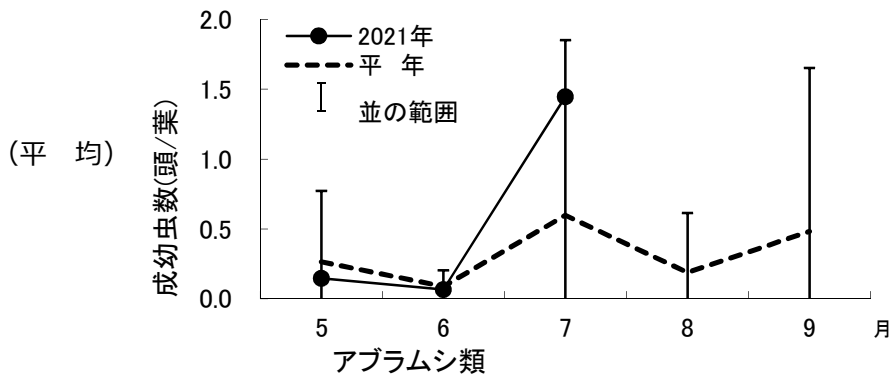
幼虫



被害葉

作物	オクラ	地域	沖縄群島
病害虫名	アブラムシ類		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報	7 月からの増減傾向	↘	
	8 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	


調査結果

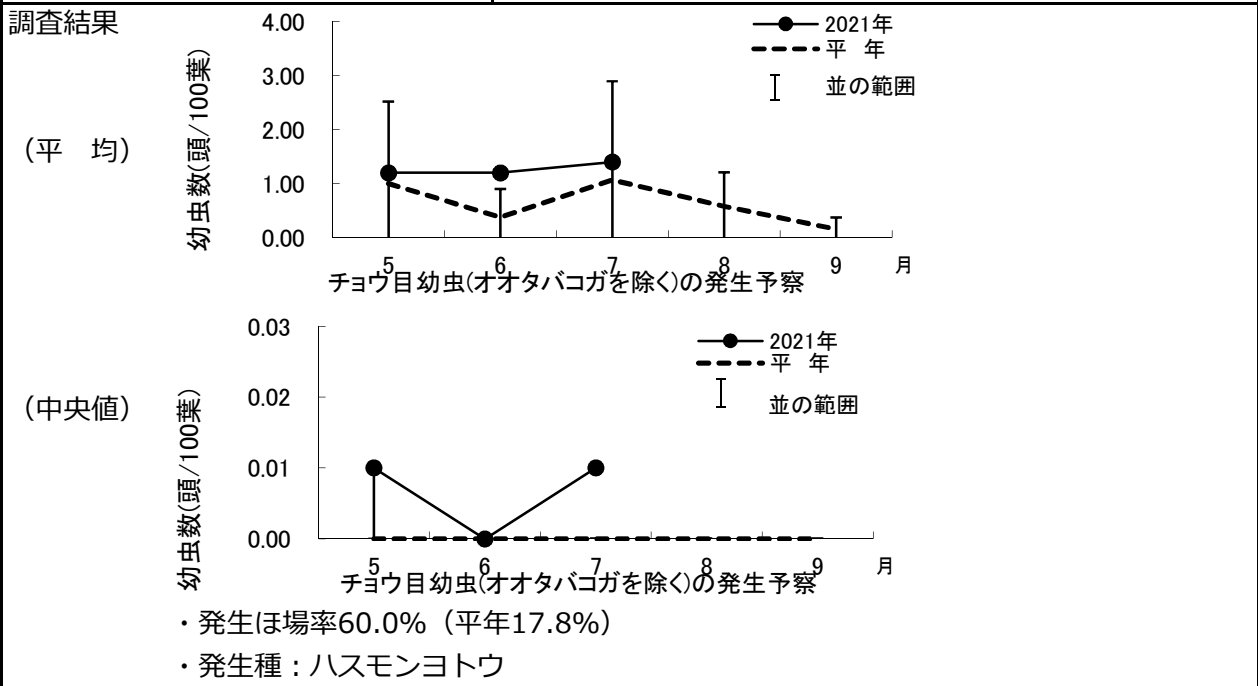


・発生ほ場率40.0% (平年26.7%)

防除のポイント

- ・多発すると新葉の萎縮や芯止まりにより生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見防除に努める。
- ・発生源となるほ場内外の雑草を除去する。

作物	オクラ		地域	沖縄群島
病害虫名	① チョウ目幼虫(オオタバコガを除く)			
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	並		
予報	7 月からの増減傾向	↘		
	8 月の発生量 (平年比)	並		
予報の根拠			平年の発生量の推移 (↘)	



防除のポイント

- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・葉裏の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。



ワタノメイガ



台湾キドクガ



フタガリコヤガ




クサオビリンガ



ハスモンヨトウ

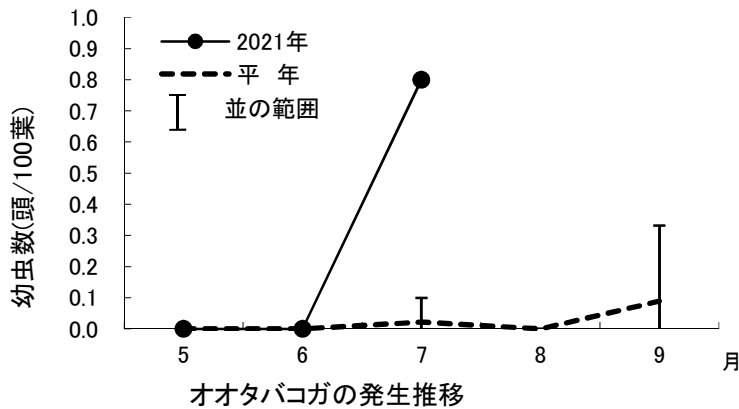


ワタアカリバ

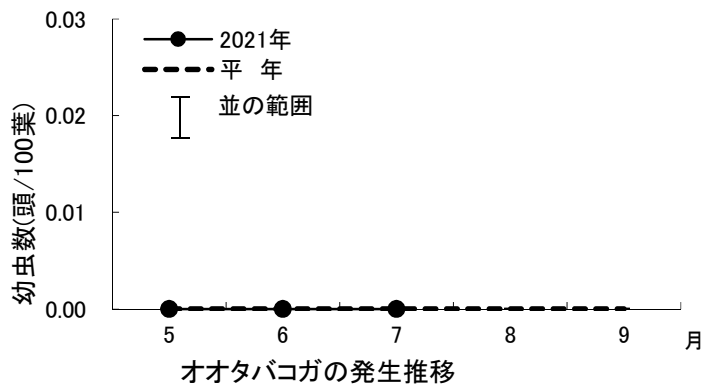
作物	オクラ	地域	沖縄群島
病害虫名	② オオタバコガ		
調査結果	7 月の発生量 (平年比)	多	
予報	7 月からの増減傾向	↘	
	8 月の発生量 (平年比)	多	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	

調査結果

(平均)



(中央値)



- ・発生ほ場率 40.0% (平年 2.2%)
- ・一部ほ場で多発

防除のポイント

- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・葉裏の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。
- ・被害果や摘芯、摘花した腋芽・花蕾等の残さは、ほ場外へ持ち出し適切に処分する。

